

# Growing

タケル

## グローイング

---

空には厚い雲がかかり、シトシトと降る雨は大地をゆっくり濡らしていった。

「もういい！」

小さな村の集落に、甲高い声がこだました。

なぜだろう。

最近なんだか妙にイライラしてしまう。

勉強や友人関係、将来のこと、今降ってる雨にさえイライラする。

僕は家を飛び出し、行く当てもなく、ただどこかに向かって走り続けた。

わからない。なぜ自分はこんな風になってしまったんだろう・・・

少し前まではこんなことなかったのに。

走りながら僕は、自分を少しだけ見つめた。

気付くと僕は見知らぬ場所に足を踏み入れていた。

「ここ、どこだ？」

急な不安が心の底から込み上げてきた。

無心になって走っていたから、どうやってここまで来たか分からなかった。

「はぁ。」

またイライラすることが一つ増えてしまった。

数えきれないほどの憤りを抱えて、僕は通ったと思われる道をただやみくもに進んでいった。

それからどれだけ歩いたのだろう。

一向に知っている道が現れない。

もう全てが嫌になってきた。

いっそこのまま帰られなくなった方が。

そんなことさえ考えてしまった。

自然と涙が僕の頬を伝った。

それでもなお歩き続けると、ふっと目の前に奇妙な神社が現れた。

建物の周りは手入れがされていないのに、中はとても真新しく、どこか神秘的であった。

僕は涙をふき、この建造物に操られるように吸い込まれていった。

中に入ると、なんだか不思議な気持ちになった。

なんだかゆったりとした、今までのイライラがなくなっていくような感覚、僕はその建造物の中でゆっくりと眼を閉じた。

「う・・・ん」

僕はゆっくりと目を覚まし、身体を起こした。

なんだろう。何だかとても良い夢を見た気がする。

これ以上ないほど幸せな夢、こんな気分はいつ以来だろう。

気付くと辺りは真っ暗になっていた。

雨も少し強くなっている気がする。

街灯一つないこの暗闇の中で、僕はひっそりと思いをはせた。

あれからどれだけの時間がたったのだろうか。

今頃母さんは僕を探してくれているのだろうか。

父さんだってそろそろ仕事から帰ってくる。

そうならば、2人で必死に僕のことを探してくれるのだろうか。

この変わり果てた僕を、本当に必要としてくれるのだろうか。

僕は起こした身体をもう一度横にして、再び眼を閉じた。